
あの夏の交差点に

川来 豊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あの夏の交差点に

【Zコード】

Z92650

【作者名】

川来 豊

【あらすじ】
川来 豊

* あの夏の日の交差点に*

主人公「僕」の大学4年間とその後を描いた作品。
僕は1番になることにうんざりしていた。1番になることがどれだけ恐ろしいことが分かっていた。

しかし、僕は瞳にとつて1番になりたいと願つてしまつた。

「1番にならない」という謎の目標を持つて大学に入学した僕と力ナダ人ハーフの友達「ジョン」との毎日、恋人「瞳」との関係を軸に繰り広げていきます。失われたものを後悔し、また失つていく僕の日々、その中で出会う大切なもの、人との関係を楽しんでください。

今は未来の過去であつて後悔を防ぐことが出来る。

僕はしばしばストレスを感じ、そしてため込んでいた。もちろん、そういうのは良くないと知っていた。だが逃げ出せない、現状維持…そんな感じだ。そしてそれはあるきっかけを境に僕に姿を表し始めた。

この話はバブル崩壊と共に産まれた僕の大学4年間とその後の話だ。漠然と過ごした日々、彼女との生活、知らない女の子と寝たこともある、そんな話だ。ちなみに僕はこの期間を青春時代とは呼ばないことにしている。それはある意味では負け惜しみでもあるのかも知れない。この期間に青春時代と言われるような出来事を出来なかつたことに対する負け惜しみである。

現在

僕は大学4年生になると、早々と就職活動を終えた。一応名の知れた電子機器メーカーに内定した。世間体を気にする僕の親は大喜びしたものだつた。しかし僕はなんだか悲しかつた。普通のサラリーマンになるのかと思うと、夢も糞もない感じてしまう。実際のところ、一生この会社で働くなんてこれっぽっちも思つていなかつた。

僕は小田急線沿いの登戸に住んでいる。新宿まで20分くらいで交通の便はいい。小田急線の他に南武線も通つているが、急行ができたら乗ろうつと思つてはいる。川崎まで急行で行けたらどんなにいいだろう、逆になぜ急行が無いのか僕には疑問だつた。実家は横浜で学校に通える距離ではあるが一人暮らしにこだわつた。1Kで家賃は5万円と安く、おまけにロフトも付いている。ロフトには天窓が

あり、晴れた夜には満天の星空が堪能できた。

大学4年

残りの学生生活をすごしている冬のある日、僕はロフトにいた。ヒーターの灯油が切れてしまっているから震えるほどに寒い。灯油を切らしてしまった僕にも少なからず責任はあるが、そもそもロフトというのは実に調子が悪い。夏は蒸し返るほどに暑く、冬はその逆。春と秋は衣替えのダンボールでごった返す。ただし、調子がいいこともある。収納、寝床、隠れ家の要素、そして…僕の場合、思い出だ。思い出…

そんなロフトから雲一つ無い夜空を何も考えず眺めていた。ぼーっと空を眺める。体中の毛穴という毛穴から血液がすっと抜けて空に吸い込まれそうな感覚を覚えた。恐怖さえ感じるくらいの静寂がそこにはあった。

その時に瞳の言葉を思い出した。お互い大学に入りたてで暇をもてあましていたころ、よく彼女といつして夜空と睨めっこをしたものだった。おかげで僕らは新しい星座をいくつも見つけた。彼女のお気に入りは僕が発見した「ポセイドン座」だった。ギリシャ神話に出てくる海の神ポセイドンが持つ矛の形のした星座であるが果たして瞳と僕がまったく同じ星を見ていたかは定かではない。ただ間違いないことは彼女が僕の隣で寝て同じ夜空を見ているということだった。僕たちはそれだけで良かつたのだ。

僕は涙をこらえながら柔らかい頬を指でなでるように、丁寧に、丁寧に瞳の言葉を思い出した。人々は言つ。「前をみろ、過去なんて関係ない。」「未来を見ろ」「そんなことをしても意味はない、思い出して何になる?」と。ふざけるな。意味はないだつて?…じゃあ僕が瞳と過ごしたあの日々は空っぽだつて言つのか。

大学1年

「これからは天文学よ、大橋君」

瞳は僕の高校2年生の時からのガールフレンドだ。背も鼻も高く、ふくらはぎは僕のそれより長いのではないかというくらいで、まさに美人といった感じだ。鼻の左側に小さなホクロがある。なぜこんな美人と僕が付き合えるのだろうと周りから不思議に思われていた。しかし僕はそんなこと少しも気にしたことが無かつた。彼女の周りはいつも笑顔で溢れていたし、僕はそんな彼女が好きだつた。もちろんそのような女の子と平凡な僕が付き合つているものだから、高校時代は僕には友達が少なかつた。彼女は僕と同じ進路も検討したが、結局別の都内の大学に入学した。

夏休みのある夜、僕たちはロフトに寝そべり、いつものように空を見ていた。

「天文学が一番面白くなるのよ

「でも君は栄養士になるために栄養学を学んでいる

「そうよ。でもね最近、分からなくなるの。本当に栄養士になりたいのかつて。ほら高校3年生の時に将来を決めちやつたようなものじやない。その気持ちをこれから4年間維持するのって辛い気がするの」

瞳がそんな不安を抱いているなんて知らなかつた。

「ところで大橋君は何で経済を学ぼうと思ったの?まさかなんとなくとかじやないでしょ?」

「まさか」

なんとなくなんて答えられるわけが無かつた。

「経済を学んでいつかたくさんの人を助けたいんだ。本来経済は人を救うためにあるべきものなんだよ。」

「大橋君の嘘は本当に分かりやすいね

彼女の顔を見ると微笑んでいた。僕は安心した。瞳は本当に賢い子で僕のことなんてすべてお見通しといった感じだつた。その不思議さが彼女の魅力でもあつた。僕は悔しいので一言付け加えた。

「でも僕はどんな形であれ人の役には立ちたい。助けたいんだ」「協力するわ」

彼女のやさしい声とともに暖かい頬が僕の腕にそっと触れた。

「空を見るといつことほね、遠い昔を見ることなのよ」

「光？」

「そう、何万年前の光を見ているの。あのラッセン座の星だって

「うう」「うう

イルカの形の星座だ。

「そう考えるとタイムマシンも遠くない」

「そうね、理論的には」

「君は天文学者は諦めたほうがいいよ

「どうして？」

僕はロフトを降りた。残念なことに真夏にロフトにいるのは15分が限界だった。この夜空の下で瞳を抱けたらどんなに素敵だらうと思つたが結局それは叶わなかつた。

「君はありもしない星座の名前を覚えすぎた

彼女はふふっと笑つてロフトを降りてきた。

現在

瞳は僕にとつて大きすぎる存在だ。彼女のあらゆる行動、言葉に刺激を受けた。

彼女は高校生の頃、弓道部で部長をしていた。栄養士の大学に入り、勉強に専念しようか迷ったが結局弓道のサークルに入った。それは僕が猛烈に勧めたからもある。彼女の弓道をしている姿はなんともいえない趣がある。的を見つめる真剣なまなざしは周りのものを見せ付けない壁のようなものがあった。もし僕の携帯電話でも鳴つてしまつたら的に僕にかわってしまうのではないかと思うくらいの真剣さがそこにはあった。しかし僕は瞳の練習を見に行くときは必ず携帯電話の電源を切つたことを最低3回は確認したおかげで僕が射られる事は無かつた。一回目だけれども瞳は本当に美人だ。これは僕の惚気話とかそういうものではない。実際彼女には某有名プロダクションからスカウトがあるくらいだった（彼女は興味があつたようだつたが、怪しいと感じたらしく断わつた）。そんなしつかり者で、しかも美人な彼女だけれど僕が一番好きだつたのはそんな彼女が崩れる瞬間だつた。

大学1年

大学に入りたての頃に一人だけで入学祝を町田で開いた。彼女は町田に一人暮らしを始めたからだ。登戸からも大して遠くなかったし、町田は意外と遊べるのだ。余談だけれど東京の人々が町田を神奈川県と間違えるのは小田急線の影響だろうと思う（相模大野 町田新百合ヶ丘というように町田駅は神奈川に挟まれている）。東口に出ですぐの居酒屋に入った。大衆酒屋のよつうな雰囲気の居酒屋で店内は賑つていた。

「おしゃれなバーね」

「そっちのほうが良かつたかな?」

「いいえ、オオハシくんらしいわ」瞳はやさしく笑つてカウンタ

一席に座つた。

彼女とお酒を飲むのは初めてだつたし、彼女はお酒 자체も初めてだつた。本当に真面目なのだ。

僕たちは生ビールを二つと枝豆、ちょっととした肴を頼んで乾杯した。僕は灰皿を頼んでキャビンマイルドに火をつけた。彼女は必至にビールの苦さに慣れようとしているように見えた。僕はさつさと飲んでしまい芋焼酎と炭酸を頼んだ。彼女のビールは三分の一を残したところで止まつた。

「飲もうか?」

「ありがとう。もう私ふわふわしてきたわ」瞳の顔はかなり赤くなつていた。彼女のこんなに緩んだ表情は初めてみた。

「女の子に似合うお酒ってなに?」と聞かれたので僕はカシスオレンジを頼み彼女は喜んで飲んだ。

彼女が楽しそうに一生懸命話している横顔を僕は見つめていた。彼女が笑う、僕も笑う。彼女の部屋の隣に住んでいる一度話すと1時間は止まらなくなる大家さんの話、学校のオカマのような先生や少しクラスがうるさかつただけで全員単位没収宣言をした先生の話。何もかもが面白かった。僕たちは同じ高校だつたのだけれど高校時代の話は一切しなかつた。暗黙の了解になつていたのかもしれない。僕たちにとつて付き合つていた高校2年間はさほど重要ではなかつた。

瞳はジュースのようにカクテルを4、5杯飲み今までに見たことが無いくらい顔が真っ赤になつていた。弓道をする彼女からは想像もつかない光景だ。彼女はカクテルのアルコール度数が高いことに気づいたようだつた。

「瞳、大丈夫かい?」僕は少し心配になつて彼女に言った。

「お洒落なバーに行つてみたいわ」彼女は少しよろつとしながら

立ち上がった。

今日はこれ以上、瞳とゆっくり話すことは出来なさそうだ。

*

案の定外に出て彼女は肩を貸さないと歩けないくらいだった。初めて酒を飲んだのならそんなものだ。僕が初めて酒を飲んだときなんて それは思い出したくも無いが 気づいたら福島県の山奥にいた。詳しくは覚えていないのだがどうやら横浜で酔い、トラックの荷台で寝てしまつたらしい。そのトラックが福島の陸運会社のものだつた。そういう訳で僕は若いながらに酒とは女の子と一緒に上手く付き合おうと決意した。

僕はとりあえず瞳をどこかで休ませることにした。駅から少し離れたちよつとした広場のベンチに彼女を座らせてミネラルウォーターを彼女に飲ませた。時間は22時20分を過ぎていたし平日だったので僕たち以外誰もいなかつた。春先にしては暖かい夜で静かな広場には街灯だけが僕らを包み込んだ。そこでは恨み、競争、慟哭、あらゆるもののが無意味に思えた。

僕に寄りかかって休む彼女の姿は僕に訴えていた。

* 私は孤独です。助けて、ここにいるよ。ねえ、あなたもなの？

私はあなたを信じているわ*

彼女の胸元からはブルーのブラジャーが覗いた。僕はこんなに無防備な彼女を見るのは初めてだと訳の分からぬことを思つたりもした。

僕は瞳に何ができるのだろう、瞳にとつて僕は何なのだろう。僕は急に不安になつた。僕にとつての瞳は癒し、安心、不思議、喜び、時には怒りである。瞳には僕の感情すべてがあつた。彼女ならすべてを受け入れてくれる。すべてだ。でも僕は彼女に何をしてきた？なにができる？彼女は僕が思つてているほど強くないとしたら？僕はもつと守つてあげなくちゃいけない。しかしその不安は無意味であることは分かっていた。いや、正確には無意味になることを願つ

ていた。

「ごめんね、大橋君」瞳が店を出て初めて口を開いた。

「大丈夫？ 気持ち悪くない？」ぼくは彼女の顔を覗き込んだ。

「もう大丈夫。調子に乗っちゃったわ。お洒落なバーに行きたかったのに。今度連れてつてね。」瞳はにこっと笑った。彼女の笑顔は僕の冷え切った心の中へ一気に入ってきてマッチをすっと擦つてくれた。小さいころに迷子になつて、親が迎えに来てくれたあの瞬間に似ていた。

僕は涙をこらえて瞳を強く強く抱きしめた。瞳は少し驚いたようだつたがすぐにこう言った。

「大丈夫。不安だつたわね。大橋くん、大切よ」

「大切よ」

そのとき瞳が「好き」ではなく「大切」という言葉を選んだ理由は分からぬ。だけれどそんなことより、やはり彼女は知つていたのだ。瞳がベンチで休んでいる時に僕が不安になつていたことを。やっぱり瞳は賢い子だ。その日は結局彼女の家に泊まつた。彼女を失うとき、僕は無くなる。ゼロ。ゼロになる。

僕のことを少し述べる。僕は首都圏の大学の経済学部に推薦で入った。良くも悪くもない学校だ。なぜその学校かと聞かれたら大半の生徒が答えるであろう「なんとなく」だ。なぜ経済学部かと聞かれたら、大半の生徒が答えるであろう「なんとなく」だ。

僕はこの大学で決めていたことがある。

* 1番にならない*

反対ならともかく、満開の桜の中を新しいスースとおろしたての靴をはいて、今にも始まろうとしているキャンパスライフを目前にしての目標としてはありえない。しかし僕はこの「ありえない」目標を胸に秘めていた。

大学の導入ゼミのクラスにジョンというカナダ人と日本人のハーフがいた。30人弱のクラスで僕たちは席が隣になりいつの間にか仲良くなつた。このゼミは大学生活とはどうあるべきか、レポートの書き方、図書館の使い方などを教わつたのだが授業の大半は教授のアメリカで「競馬で見る、ミクロ経済学」という論文を発表し絶賛を受けた自慢話だつた。ジョンに最初に話しかけられた言葉は「この授業意味あるの?」だつた気がする。

「ないね」

ジョンは身長が185センチあり金髪をなびかせている。その金色は5、6百円で買える染髪剤ではとても出すことのできないつやがある。おまけに水泳をしていたから体つきはミケランジェロのダヴィデ像を思わせた。

ジョンはルックスと違ひ英語が全く話せなかつた。僕の方が話せたし、事実英語の点数も僕の方が良かつた。

「なぜ英語を勉強しないんだい」

ジョンはこの言葉をひどく嫌つた。

「完璧になるにはあまりにも多くの時間がかかるからさ、分かる?」

分かる?と言つのがジョンの口癖だつた。それは不思議な事に、僕には全く不愉快な気分にさせなかつた。むしろ心地良く感じた。逆に彼の言葉の最後にそれがないと違和感を感じるくらいだ。

「分からない」

「君は母国語をネイティブにすらすらと、当たり前に話せない恐怖を知らないからさ」

なるほど、ジョンの言つている事は分からなくもなかつた。僕は日本人のルックスでありながら日本語が話せない。しかし周りの人は次から次へと私にペラペラと話しかける。僕は「こんにちは」がやつと聞きとれるけるくらいだ。その人々はさんざん僕に話しかけた後、ため息をつき残念な顔をして僕から去つていぐ。これは恐怖以外の何者でもない。

「分かつた気がするよ」

「良かつた、恐怖だろ?」

現在

二人でよく渋谷に行つた。何をしに行つたのかは覚えていない。ただ、10回遊ぶうちの8回は渋谷だつたと思う。特別気に入つた店があるわけでもないし、家が近いわけでもない。おまけに僕たちは人ごみをひどく嫌つた。

ただ、渋谷は何かを感じさせてくれた気がする。夢、挑戦、希望。何かでかいことをしてやろうという気持ちにさせてくれたのかもしない。

大学1年

2006年、大学1年の夏休みに僕はスクランブル交差点のスターバックスでジョンを待つていた。真夏でひどく暑い日だつたし、この日も大した用事は無かつた。せいぜい輸入CD屋でウイーザーやステイーブ・ヴァイといった訳の分からぬ組み合わせのCDを探

したり、視聴したり、そんな程度だ。僕はバンド活動をしていたし
あらゆるジャンルの音楽をPioneerのアンプで聞いた。

Pioneerのアンプ…

たくさんのアンプを試したが結局これに戻ってしまう。定価でも
数万程度のプリメインアンプである。いいものはいいのだ。または
「慣れ」かもしれない。ここから学んだ事は「慣れる」ようになれば
それは自分にとって「良い」ものだということである。マンネリ
した彼女にも同じことが言える。

僕はアイスコーヒーを注文して砂糖を断り、ぽんやり外を眺めて
いた。ガラスだらけの渋谷はもはや自然と呼ばれる物は何一つ無か
つたし太陽光ですらあらゆる物に反射して僕の目を睨み続けた。信
号が赤に変わるとどこからともなく人がやってくる。十秒で信号前
の広場はごったがえす。信号が青になると全員が歩き出す。何をそ
んなに急いでいるのか僕には理解できなかつた。それは水洗トイレ
のタンクのように繰り返す。溜まつては放出、その繰り返しだ。
しばらぐすると申し訳なさそうにジョンが来た。

「井の頭線が遅延してさ、すまない」

僕はかまわないと申つて、コーヒーを飲み干した。

「さてどこ行く? あ、遅れた代わりに今日の夜女の子を紹介する

よ

僕たちは鼻で笑い合い店を出た。

外に出た瞬間、店のクーラーを恨みたくなるような温度差で一瞬
めまいがした。僕はそのときになつてコーヒーにミルクを入れ忘れ
たことに気づいた。

僕とジョンは店を出るといつものように輸入CD屋に向かつた。
ジョンは世間一般がそうであるように「ポップやパンクを好んだ。
それよりもジョンは僕の変わった音楽性に興味があるようだつた。

「いつも思つてたんだけど」ジョンはジョン・バックリーのレコードをつまみ上げながら言つた。

「きみはなぜ詩の入つていない曲なんて聴くの？」

「インストゥルメンタルのこと？」

「そう、ジョーサトリアーーとかステイーブ・ヴァイとか。いつからだい？」

考えてみれば高校生のころから僕の音楽性は少し変わつていた。もちろんおかしいという意味ではなくて普通の高校生が聴く音楽とは少し違つてゐるという意味だ。僕だってできる事なら最新のJ・ポップや格好いい洋楽なんかを歌いたかったのだが、興味が持てなかつた。興味の無い歌を無理やり覚えて歌うことはストレス以外の何者でもなかつた。おかげで一回カラオケに誘われた女の子からは二度と呼ばれることは無かつた。

「昔からだよ、どうしても他に興味が持てないんだ。」僕とジョンはレコードを一枚ずつレジに持つていつた。

「それなら無理することないね、興味ないものには手をつけない、それでいい。ただね、もつたいたい氣もする」

僕たちはCD屋を出た。この日クーラーを恨んだのは2回目だつた。そして早くも次の行き先に困つた。

僕はさつきのジョンの言葉を思い出した。

「あ、そういえばさつき言つてた女の子つて」

「ああ、今夜を楽しみにしてて。昨日の夜誘つたんだ。友達さ」

ジョンの笑顔が不気味だつた。

結局夜まで時間稼ぎをするためにビリヤード屋に入つた。ビリヤードといつのは本当に暇つぶしに適している。1時間なんてあつという間だ。なぜだかは分からぬけれど僕たちはナインボールしかしなかつた。

「きみはまだ彼女と付き合つてゐるの？瞳ちゃんて言つたっけ

「ああ、ジョンは続いてるかい？」

「まあね。これは瞳ちゃんにばれない様にね

ジョンは自分の彼女のことをあまり話したがらなかつた。写真すら見たことがない。詳しく聞こうとしてもいつも上手く話を変えられてしまう。ジョンの話を変える能力は全国でもトップクラスだろう。それほど彼女のこと話をしたがらないのだから可愛いすぎて誰にも見せたくないのか、その逆か。僕は後者のほうだと思つただが真相は分からぬ。

「言えるわけが無いよ、でもお酒を飲むだけだらう?」僕はわざとらしく疑いながらたずねた。

「もちろんだよ」相変わらずにやにや笑つてゐる。

瞳のことは好きだ。彼女はすべてが美しくて、何に対しても芯があるし僕のことをきっと誰よりも理解してくれてゐる。しかし急な飲み会にひょこひょこやつてくるような女の子にも少なからず興味があつた。

「楽しむけど瞳を裏切るようなことは出来ない、わかるだらう?」

「本当に君はまじめだ」ジョンはやれやれといった感じで玉を突いた。9番の玉が1番ポケットに吸い込まれた。ジョンはいつも以上に調子がいいように見えたが僕はそんなジョンに5戦3勝と勝ち越した。僕は玉を突きながら、実は夜の飲み会がとてもなく楽しみであつた。そんな心を映したスコアだったのかもしれない。ビリヤードはモチベーションが大きく関係することをその時学んだ。

ジョンとビリヤード屋を出てコンビニのトイレに向かつた。ヘアワックスをつけるためだ。僕はすこし気合を入れすぎて、ワックスをつけすぎてしまった。ジョンに聞いたが気にならないから大丈夫だといった。ジョンもつけすぎたかと聞いたが大丈夫だと伝えた。人は驚くほどに他人に無関心なのだ。それは冷たいという意味ではなく、当然のことだ。結局のところ、人は他人なんてどうでもいいし無関心なのだ。ただその無関心を「心配」と「笑顔」という嘘で包んで人々は関わっている。そつやつて成り立つていて、そういうものだ。

コンビニから出て待ち合わせ場所に向かつた。

「どこで待ち合わせだい？」

「6時にハチ公さ」

「THE待ち合わせ場所だな」

6時を少し過ぎたころ女の子たちがやつて來た。

「おつと言い忘れたけれど彼女いないふりで頼むよ」ジョンがささやいた。

「おまたせ。ジョン君」

ジョンが僕を大学の友達の大橋だと紹介した。すこし変わったやつだけどよろしくという余計な事を付け加えた。僕たちは居酒屋に向かつた。

自己紹介が始まった。一人は由梨絵という背の高い女の子だ。綺麗な黒髪が印象的で都内の美術大学に通っているという。ぼくがこの子の歌をバンドで作るとしたら題名は「その髪で縛つて殺して」だなど考え、一瞬にやつとした。おかげで笑顔が素敵ねと言つてもらえた。僕は大切なときに余計なことを考えてしまう。その代表がこの「歌の題名」だ。

「由梨絵ちゃんこそ」

もつ一人は小柄の由希という子だ。髪は茶髪で化粧が濃かつた。まあこんな印象から分かるように僕は圧倒的に由梨絵ちゃんを気に入つた。

話も盛り上がり、この飲み会は久々に楽しいと思えるものであつた。僕はトイレに立ち、手を洗つているとジョンがやつて來た。

「君は相当由梨絵ちゃんが気に入つたみたいだな」

「気に入つたとかそういうのじゃなくて、まあ純粹に楽しいかな。でもなあ」僕は鏡を見ながらつぶやいた。

「合コンしちゃつてるなあ、瞳を裏切つてる」

ジョンはやれやれといった表情で僕に反論した。

「まあそう難しく考えるな。これは合コンなんかじゃない。んん、そうだなあ、」これといった案がなく一瞬沈黙が起つた。

「勉強会、これは勉強会だ」

本当にジョンは面白いやつだ。

ジョンとは女の子の趣味が合わない。だからこそ喧嘩にならないし、うまく付き合えていたのかもしれない。まあ正直なところ、ジョンの女の子の趣味は少し変わつていて、本当に失礼だと思うけど、そう感じることがしばしばある。ある日、学校の帰りにレンタルビデオ店に2人で入つた。大半の男子がそうするように僕たちは18禁コーナーに向かつた。同じ棚を見ていて、それか というものがかり手に取るのである。

そういうわけでこの合コン、いや、勉強会でも由梨絵ちゃんを独り占め出来た。

その後の事は覚えていない。

目が覚めて横を見ると裸の由梨絵ちゃんが寝ていた。どうやらここはホテルだ。彼女のふつくらとした乳房を見て僕はやつてしまつた。嘘であつてくれ、何もかも。それこそ、その髪で縛つて

殺してくれとさえ思つた。ただそんなことを思つても何一つ変わらないことは分かつてゐた。彼女がゆっくりと田を覚ましこちらを見つめた。僕はなんて言つたらいいのか見当もつかなかつた。沈黙が僕たちを支配した。それは5秒であつたかもしないし5分だつたかもしない。いずれにせよ時間を越えた深い、深い沈黙があつた。僕は恐怖をこらえ、彼女におはようといった。

「おはよう」彼女は下着を着け、ワンピースをさつと着て帰る私宅を済ませた。怒つているのか、まんざらでもないのか、彼女の表情からは読み取れなかつた。彼女は、またねと言い残して部屋を出て行つた。

いずれにせよ残つたのは「瞳を裏切つた」という事実と由梨絵ちゃんの携帯の番号の書かれたメモ帳だ。番号の下にはこいつも書いてあつた。

「ほかの女の名前を言つるのは最低、でもあなたといふと楽しい」「悪くはない気分だつた。

*

僕は由梨絵ちゃんが部屋を出た後、一人で必死に昨夜のこと思い出そうとした。そもそもここはどこなのだろう。テーブルに無造作に置いてあつた安っぽいライターの住所を見つけた。

新宿区歌舞伎町／ ホテル しゃるる

コマ裏か。

場所が新宿だと分かつてこさか安心した。どこかの田舎の山奥のホテルだつたらどうしようかと思つてゐたからだ。それほど記憶がないのだ。僕はひどくむなしくなつて窓を開けた。昨夜を思い出す何かを探そうとした。朝の9時だというのに通りにはわけのありそうな人たちでごつた返してゐる。僕は一人のホスト（その髪は鶏のとさかを連想させた）をぼつと眺めていた。きれいなシンデレラのよつなドレスを着たお密さんを相手に必死に話してゐる。鶏が話すとシンデレラは必ずといつていいほど笑う。よほど鶏の話が面白いのか、シンデレラの笑いのツボが恐ろしく浅いのかは分からぬ。

おそらくお客様のアフターが何がだろう。

僕は理解できない。シンデレラはボトルに数万円という詐欺まいのお金を払つて鶏と話を楽しむ。鶏はその金を得るためにシンデレラを楽しませる。一人とも分かつてているのだ。その会話には何の意味もないことを。からっぽの、まったく意味のない会話だということを。ただ残念なことにこの世のほとんどの会話がその部類に入ることも僕は分かっていた。新宿の朝は驚くほどにさわやかで朝日はいつもと変わらず僕を照らした。カラスが朝ごはんを探し回つている。高級料理店の前には収集される前の生ごみというご馳走が転がつている。カラスたちは大声を上げて仲間に知らせる。

「カーア、カーア（おい、飯があるぞ、高級料理だ）」

「カーアカーア、カーア（本当にかい、ここにもあるけれどネットが張つてあつて取れないよ）」

「カーアカーアカーア（馬鹿だなあ、そんなのちょっとどうかせばすぐ取れるんだよ、そつちには何があるんだい？）」

「カーア、カーアカーア（こつちは焼肉店だから生肉がたつぱりさ）」

「カーアカーアカーアカーア（よし、巣に持つて帰つてパーティーだ、今日も生き延びれる）」

大声で話していた鶏とシンデレラがカラスに向かつてうるさいと言う。あつち行けと。

どちらが本当に必要な会話なのだろう。それは間違いなくカラスの生きるための会話だ。ただ、カラスの会話だけだと灰色の世界になつてしまふのかなとも感じた。

僕たちは無駄な会話に慣れすぎてしまったのかもしね。

現在

僕は瞳とのつながりを強くするために、色々なことをしてきた。2007年の夏、瞳の20歳の誕生日に、歌をプレゼントしようと考えた。今までバンドマンらしいことをしてあげていなかつたし、まあ正直なところ高価なプレゼントを買うことが出来なかつたのだ。瞳は豪華なバー ティーや高い指輪とかを求めるタイプではないことは分かつていたし、僕があげたものであれば心から喜んでくれた。でも本当は高くていいものが欲しかつたのかもしれないし、出来ることなら僕だつてダイヤの入つたネックレスくらいあげたかつた。だから僕にできる最高のプレゼントをあげようと考えたのだ。

僕がバンドで作る歌は正直ひどいものだ。だいいちバンドの存在のテーマが「ほぼギャグ」である。「ほぼ」というところがいい。ふざけているけれど伝えることはしっかりと伝える。それが僕やバンドメンバーの方向だつた。

とはいっても歌詞の内容はストーカーをして付き合つた話や、魚肉ソーセージは口の要素を含んでいた内容だつたから、瞳をライブに誘つたことはなかつたし、客のほとんどが男だつた。

大学2年

瞳の誕生日のちょうど一ヶ月前の8月1日、僕は朝早く、ロフトで作詞を始めた。テーマはすぐに決まつた。「瞳との繋がり」だ。彼女との繋がりを最大限に表現したかつた。

しかし僕は詩を書き始めて1時間後、切なさに襲われた。僕と瞳の繋がっているものつて何なのだろう。瞳は、僕と繋がっている、幸せだと思ってくれているのだろうかと。このとき僕は彼女に関してはネガティブ思考なのだと気づいた。

「今日はやめておこう」「う

瞳の20歳の誕生日が1週間後と迫った日、いよいよ僕はあせり始めた。まだ1フレーズも完成していなかつたからだ。瞳との繋がり。僕はいつもどおり口フツに上がつて作詞を始めた。その日は雨が降つていたし、8月も終わりに近づいていたので耐えられないような暑さはなかつた。あれほど嫌つていた暑さや蝉の歌も、いざ無くなるとなんだか切なくなる。そういうものだ。

僕はメモ帳を取り出し、メインとなる詩を箇条書きに書き出すことにした。はじめからこうすればよかつたのだが、いかんせん僕は追い込まれないと行動しないタイプなのだ。

僕はメモの一番上に・つながり（仮）・と書いた。なんもありきたりな曲名だと自分でも一瞬恥ずかしくなつた。でも曲名なんて後で変えればいいと思つていたし実際のところ名前なんてどうでもよかつたのかもしれない。僕はこう続けた。

テーマ、瞳とのつながり

- ・ 瞳は僕の中で大きすぎる存在
- ・ 君とずっといたい

いつの間にか雨は止み、広辞苑のよくなぶ厚い雲の間からわずかに光が差し込んだ。

・ The senses that connect you & amp; me are the love and the instant

（君と僕とを繋げていた、その感覚は、愛と本能）

辞書で引いた文であるから文法があつていいか分からない。でもつままりそういうことだ。瞳と僕は本能で繋がれている。

2007年9月1日、いよいよ瞳の誕生日がやつてきた。空は彼女を全力で祝つてくれる様な、また僕が嫉妬するよつな快晴だった。今日、彼女を祝うのは空じゃない、僕だ。

午前10時に町田の彼女の家に迎えに行く約束であった。彼女には電車で行くと伝えてあるのだが、僕はGTRをレンタルしていく計画を立てていた。僕なりのちょっとしたサプライズである。レンタカーの手続きをしていくとき少しげつそりした背の高い女性店員が僕に尋ねた。歳はおそらく28、9といったところだらう。

「本日のレンタカー利用目的を教えてください」

「ああ、えつと」僕は一瞬混乱した。デートなんて真正直に答える必要はないし、レジヤーでもない。だいいちそんなことを聞かれるとも思わなかつたからだ。

「ドライブです」

「ドライブですね、行き先を教えてください」僕は少しおかしいと思つた。なぜそんなことを聞くのだろう、だいたいこの女の人は少し不気味だ。僕は疑い始めると止まらなくなる。

「ここいらへんです」

「え？あ、はい、ここいらへんですね」その女店員は一瞬困惑したよう見えたがすぐうなずきながらパソコンにカチカチとなにかを打ち込み、奥からキーを持ってきた。

「申し訳ございません、ただいま GTR の方が車庫に無くてですかね」

せつからく予約までしたのにとも思つたが、あまりにも申し訳なさそうに言うので逆に申し訳ない気持ちになつた。

「じゃあ今は何の車があるんですか？」

「大きなお車ならあるのですが、ええつと。ミニバンです、本当に申し訳ございません、そちらでよろしいですか？」僕は諦めた。

「かまわないですよ」

こうして瞳の家の近くに着いた。彼女の家はおおきな通りから少し入つたところにある。借りた車ではおそらく入れない道幅だったのと、その通りに車を止めて彼女を迎えて行った。

インターフォンを鳴らし、彼女が出てきた。彼女の笑顔を見るたびに僕は不安とか悲しみとか無意味でどうでもいい事だと思ったもの

だつた。この日も最高の笑顔を見てくれた。

「今日はよろしくね」

「最高にいい日にしてみせるさ」僕は自分でハードルを上げてしまつたことに気づき、彼女にそれを伝えるとふふっと笑つた。車に戻るとフロントガラスに駐禁の切符が張られていた。やられたらと思ったが、瞳に気づかれないようにさつとそれをポケットにしまつた。駐禁から始まる誕生日なんてかわいそうすぎる。僕にとつて駐車禁止の罰金と減点は、瞳と過ごす時間と比べればたいしたことはなかつたのだ。瞳は車にとても驚いて、喜んでくれた。

「さ、出発」

僕等の2007年の9月1日という特別な日はこんな風にして始まつた。僕等は一緒に過ごした、それはまぎれも無い事実である。その事実だけで冷え切つたこの世界も悪くはないと思えたし、いささか楽しくも思えた。僕は瞳を見て、彼女は僕を見つめていた。

ロフトについて述べる。辞書にはこうある。

ロフト【ロフト】 ? 屋根裏部屋。倉庫などの上段。

これは間違いないし、誰が聞いても納得する説明である。ロフトというのはただ単に屋根裏部屋なのだ。しかし僕にとってロフトは特別すぎる場所である。ロフトについて辞書一冊分の説明を書けと言わればやるだろう（依頼が来ないことを心から祈るが）。

僕は悩む時、怒る時、言い訳を考える時、曲を作る時、思い出し笑いをする時そして泣く時はいつもロフトにいる。ロフトと感情を共有し、表現してきた。それはある意味では「場所」ではなく「パートナー」といったほうが適切かもしれない。感情を共有できるパートナーを持つ人もいれば、いない人もいるだろう。いやむしろ後者の方が圧倒的に多いだろうと思う。人は楽しく笑い、良い事を期待し胸膨らませる。ときには腹が立ち、悩み、泣き崩れる。これらを心から共有できるパートナーを見つけることは人生にとつて大きな財産になると僕は考えている。ある人はそのパートナーが親であり、またある人は友人であり、またはペットであるかもしれない。もしかしたら「近所さんかもしれないし、セックフレンドかもしれない。僕の場合、たまたまそれがロフトである、それだけだ。ひとつ言えることはそれが「誰であるか」はさほど関係なく「いるかいないか」が大切である。

*

「君はさ、本当におかしいことを言つよね。毎回毎回、まだから飽きないよ、君といふと。それは君にとつてロフトが落ち着くだけさ、分かる？」

ジョンに僕の感情の共有できるパートナーはロフトだということは理解しにくいようだった。まあ無理もないとも思ったが僕は反撃してみた。

「じゃあジョンは共有できる相手はいるのかい？」

「僕はねえ…」ジョンはかなり困ったように見えたし、なんだか申し訳なくなってしまった。

「まあほんどの人がいないと思うよ。僕はたまたまいて、それがたまたま人じゃなくて場所だった、それだけの話だよ」

そのとき初めてジョンの孤独の部分に触れた、そう感じた。もしジョンが孤独を感じ、それを共有する人がいなかつたらと思うと少し悲しくなり、彼に対して優しくなれた。

*

人は一瞬の感情の変化で、他人に対して優しくなる。他人が惨めでかわいそうにみえると協力し、励ます。しかし逆を言えば人は他人が惨めでかわいそうでなければ見向きもしない。僕はこういうのは大嫌いだが、残念ながら僕もその部類に入ってしまう。一瞬他人がかわいそうに感じてしまうと、優しくなる。自分自身、一番嫌いなところだ。大嫌いだ、なんでいつもやさしい気持ちでいられないのか。

結果から言つと瞳の誕生日はいものだつた。

*

僕たちは軽快に車に乗り込み、まず高速へ向かつた。行き先はお台場だ。瞳が大好きな場所である。もちろん瞳には秘密なのであるが、まあ首都高に乗つたあたりで気付いてしまうだらう。車内は誕生日だからといって特別な会話は無かつた。

「今日はどこに連れて行ってくれるの」

「内緒だよ、気づいても知らないふりしてね

「わかつたわ」

瞳がにこつと笑つた。

お台場に着き1日1500円の駐車場に車をとめた。

「一度限り有効」

駐車場の看板を見た瞳がぼそつと呟いた。

「そうさ、一度出たらもう入れない。それがどうかした?」

「つうん、何でもない。ねえ早く行こつ」

瞳は僕の手をぎゅっと引っ張つた。僕の体が遅れて瞳の方に引っ張られた。

ショッピングモールでなにかプレゼントを買わなくてはと思い瞳に聞いてみた。

「今欲しい物は無いわ」

お台場は本当に良くできいて、朝からテーマパーク、テレビ局、海と一緒に遊ぶと夜になる。それから豪華な夜景を楽しめると言うわけだ。僕たちは満足感、疲労感と共に駐車場へ向かつた。車に床つた時にはあたりはすっかり暗くなつていた。瞳が助手席に乗つたのを確認しエンジンをかけた。ガソリンメーターが5分の3のところ

ろを指していた。あまり燃費の良い車ではないようだ。

「そうねえ、あつさりしたもののがいいかな」

瞳に何が食べたいか聞くと大抵この答えが返ってくるし、今回もそうだった。

「あつさりしたものか、任せて」

僕たちは口を合わせにこつと笑いあつた。これといった案もなかつたのでとりあえず登戸へ向かつことにした。

*

お台場、晴海あたりの道は本当にきれいだ。それに道が広いから走つていて気持ちがいい。そんなことを思つていると瞳の寝息が聞こえた。シートベルトを両手でつかみながら、窓側を向いている。

「寝ちゃつたの？」

問い合わせたが返事はない。相当疲れたようだ。

車の速度は65キロを指していた。休日の夜とあって道は空いている。オレンジ色の街路灯がどこまでも等間隔に並んでいる。その光は僕たちを覗き込み、目を細め微笑んでは後ろに去つて行つた。次から次へとやつて来るものだから、次にやつてきた光に挨拶をした。

「いらっしゃい」

「お邪魔します」

光が答えたので僕はまた話しかけた。

「きれいな光ですね」

「ありがとう。ところで隣で寝ている人は誰？」

「瞳だよ。僕の彼女さ」

「彼女？ 彼女って何？」

「大切な人さ」

「私は一人ぼっち」

光が悲しそうな顔をしたので励まそつとしたが、その瞬間に去つて行つた。

僕はなんだか悪いことをしてしまつたと反省した。

僕は瞳の方に目をやつた。相変わらず彼女の頬の上を光が駆け抜けていた。彼女が寝言のような声と共にこすりに寝返りを打つ。口の両脇がぴくっと上がり一瞬笑つたよつて見えた。

この日のオレンジ色の街路灯は強く僕の心に残つてゐる。海から見た夕陽は僕たちに帰らないでと悲しく語りかけてくれた。レインボーブリッジから見たお台場はこれでもかと言わんばかりに輝いてみせた。しかしそれ以上だつた。それ以上に僕の心に刻み込む何かが街路灯にはあつた。だだつ広い綺麗な道にオレンジ色の街路灯だけが続く、ただそれだけであるのに。

大學2年

結局僕は歌をプレゼントするタイミングを逃してしまつた。といふか、実はギターを家に忘れてきてしまつたのだ。朝はレンタカーの事で頭がいっぱいだつた。結局、僕の家に向かつた。瞳は相変わらず助手席ですやすやと寝息をたててゐる。時折寝返りを打つのが、こちらを向く時間より窓側を向いている方が長かつたよつて思う。

「瞳、起きて。着いたよ」
「本当にごめんなさい…」
「瞳? どうした?」
「…」

一瞬ヒヤッとしたが寝言のよつだつた。どうやら怒られてこる夢でも見たのだろう。

「瞳、起きて、着いたよ。うちだよ」
瞳は目だけをゆっくり開けた。しばらく考えてから話し始めた。
「あ、大橋くんごめん。ずっと寝ちゃつてたのね」
「いいよ、たくさん歩いたもんね」
「うん、本当に楽しかつたわ。ありがとうね」
僕たちは車を降りて部屋に入った。

僕はいつ歌をプレゼントしようか考えていた。そのうちに緊張してきたので思い切って切り出すことにした。

「瞳、ロフトに行こう」

「何？新しい星座見つけたの？」

「違うぞ、おいで」

僕は先にロフトによじ登り、置き忘れたギターと再会した。

9月のロフトは思ったより暑くなく、むしろ涼しさが悲しかった。瞳は遅れてやってきた。

「大橋くんが珍しい、サプライズかしら」

そして僕はギターを抱えた。今までのどんなライブよりも緊張した。レコード会社の関係者が見に来たライブよりもだ。ロフトは広くないので僕と瞳の距離は1メートルくらいで僕たちは何も言わず向かいあって座った。瞳は何が始まるのかわくわくした表情をしている。これといった始める合図は無く、僕はギターを弾き始めた。ゆっくりとAマイナーのコードを弾いた。それからBマイナー、Eマイナードと続く。ギターの柔らかな音色に乗せて歌い始めた。

サビに入る。サビはマイナー調からの脱出だ。C、G、D、Eマイナードと爽やか

でどこか哀愁漂つコード進行にした。

サビ

I just make you cry (君を泣かせたり)
I just make you smile (喜ばせたりしているけど)

But there's no telling what will happen in our future (僕たちの未来は分からぬ)

ギターと僕の声以外は何も聞こえない。蝉も、エアコンも、外の暴走族のバイクも、僕たちのライブを静かに聞いていてくれているよ

うだ。

またC、G、D、Eマイナーとメロディーを繰り返す。

There's nothing to be afraid of . (けれど心配はいらないよ)

The senses that connect you & a
mp; me are the love and the in
stinct

(僕たちをつないでいるその感覚は、愛と本能だから)

僕がこの歌を通して瞳に伝えたかった表面上のことは、強いつな
がりだ。表面上は、である。実際のところ、僕は不安で不安でたま
らなかつた。その不安を「愛と本能で繋がっている」という理由を
つけて自分自身を安心させていた。瞳を失いたくなかった。ただそ
れだけであったのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9265o/>

あの夏の交差点に

2010年12月13日06時39分発行